

附属間連携研究「中高社会接続期の研究」

玉谷 直子（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター）

1. 本プロジェクトの目的

お茶の水女子大学附属高等学校では、学年定員の6割弱をお茶の水女子大学附属中学校から、4割強をその他の中学校から受け入れている。しかし附属中学校と附属高等学校は別の組織であるため、カリキュラムには連続性がない。近年、附属中学からの進学者と、その他の中学校からの進学者との間の学力差に対する問題意識が附属高校内で高まり、附属高校内ではプロジェクトを立ち上げて、解決に向けての努力が進められてきた。それらの活動の中で、附属高校内のみの活動だけではなく、附属中学校と附属高校の連携、特に各教科間の連携の必要性が改めて認識されるようになった。

本プロジェクトは、そうした問題意識を出発点としスタートした。同じ構内にある、お茶の水女子大学の附属学校としての関係をいかし、特に中高6年間をお茶の水女子大学附属学校で過ごす生徒の学力を伸ばすために、それぞれの授業や課題、評価等についての情報交換を行い、今後、どのような取り組みを行っていくことが効果的であるかを検討し、実際の授業に反映させていくことが本プロジェクトの目的である。そうした取り組みの成果は、他の中学校からの附属高等学校進学者に応用することはもちろん、他の中学校、高等学校での授業にも応用することが可能であると考えている。

2. 今年度の活動

今年度は、まず、附属中学校を卒業後、本校に入学した生徒の学習意欲や学力について検証することにした。検証の対象としたのは、附属中学校在学中に、「検事総長に会って裁判員制度について考えた生徒」（4名）と「選択社会を履修し、裁判員制度等について考えた生徒」（6名）の9名の高校3年生である。検証の材料として、検証の対象となる生徒が附属中学校在学中に作成したレポート及び高校2年の冬休みに作成したレポート、検証の対象となる生徒の同級生が高校2年生の冬休みに作成したレポートを利用した。高校2年生の冬休みに作成したレポートは世界史の課題であり、「映画を見て、感想ではなく、考えたことを述べる。」という内容であった。全員に提出を義務づけたものではなく、希望者のみが提出することになっていた。

検証の対象となっている生徒は全員が世界史のレポートを提出しており、社会科学習への

意欲が持続していることがわかる。レポートの内容についても、「それでもボクはやってない」を観た生徒が6名、「12人の怒れる男」を観た生徒が3名と司法に関する問題への関心が高く、中学生の頃に授業で学習したこと、体験したことが、高校での学習に影響する様子が見られた。また、中学生の頃に積極的に授業に取り組み、よく考えてレポートを作成していた生徒が高校でもしっかりとしたレポートを作成しているのに対し、中学3年生の時に誤字脱字等も多く、考察ができていない拙いレポートを提出していた生徒は、高校2年生の段階でも、形式・内容ともに不十分な点が多いこともわかった。

その後、昨年度、「中学3年生から高校2年生の夏まで」と設定した接続期の生徒について、その「社会科学習に必要な書く力」の差を見るため、調査を行った。調査対象は、中学3年生、高校1年生、高校2年生である。中学3年生には、臓器移植法改正に関する授業を行い、その後意見を書かせた。また、夏休みの宿題として、明治期における改革の中で重要だと思うものを3つあげさせて、その理由を書かせた。さらに、大日本帝国憲法と日本国憲法の最も違う点についても、自分の考えを書かせた。この宿題は、高校2年生にも課し、両者を比較した。高校1年生には、1学期の期末テストの中で臓器移植法改正に賛成か反対かを論じさせた。これを、中学3年生が書いた臓器移植法改正に関する意見と比較した。

これらの検討を通して、やはり接続期後期の高校2年生は、中学生3年生よりもしっかりとした「社会科学習に必要な書く力」を身につけていることがわかった。また、高校1年次に「現代社会」の授業において行っている論理的な文章を書く訓練がその大きな要因となっている様子も確かめられた。

この調査の詳細については、お茶の水女子大学人間発達教育研究センター子ども発達部門が発行している『研究集録』2号において報告しているので、参照していただきたい。

3. 終わりに

2008年度より2年にわたって実施した連携研究により、中学校の教員が高校生の、高校の教員が中学生の書いたものを読むことを通し、それぞれ、日頃は接していない発達段階の生徒の「社会科の学力」を知ることができた。それを踏まえて、それぞれが今後の授業において、何を取り上げるか、どのような方法を取るか、到達目標をどこに置くか等について、考えることができた。この点が、2年間の研究の最も大きな成果であると考えている。「中高社会接続期の研究」は今年度で終了するが、今後も生徒の力を伸ばす授業を行っていくため、連携しあっていくことが必要だと感じている。